

予防接種の up to date

さくらぎ小児科 橋本 総子

（小学6年生〜高校1年生の女子に
子宮頸がんワクチン）

小学6年生になると二種混合ワクチンの接種のために、診療所にきてくれるお子さんがたくさんいます。女の子であれば、「次の定期予防接種は、ヒトパピローマウイルスワクチンですよ。」とお伝えしています。すると、不安そうな顔になる保護者の方が多いですが、「癌を予防できるワクチンですので、小学6年生〜高校1年生の女の子には接種を勧めています。海外では男の子にも定期予防接種になっている国もありますよ。」とお話をします。

このワクチンは2013年4月に定期予防接種となりましたが、その2か月後には副作用の調査のため積極的な接種勧奨が中止されました。皆さんもご存じのように、ワクチン接種後に寝たきりになってしまったり、体の広い範囲の痛みがでたなど、多様な症状が起きたと報告があったためです。そのため、名古屋市では7万人の大規模な調査が実施されました。結果、ワクチンを接種した人と接種していない人で多様な症状の発生頻度には差は認められませんでした。もともと思春期のお子さんは、自立神経障害や長らく体調不良が生じやすい年齢です。また、ワクチン接種後に心配な症状がみられても、専門医の治療によって改善することがわかりました。接種後に不安な症状を認めた場合は、自己判断をせず、「ヒト

パピローマウイルス感染症の予防接種後に症状が生じた方に対する相談窓口」に相談してみてください。

日本では、8年間という長きにわたって積極的な接種は控えられていましたが、2021年11月、ワクチンの積極的な接種が再開されました。ワクチンによる有効性が、副反応のリスクを明らかに上回ると認められたためです。ワクチンでは、すでに体に感染してしまつたウイルスを排除することはできません。それに、このウイルスは80%の人が生涯で一度は感染すると言われています。感染しても多くは自然に排除されますが、もしウイルスが長い間子宮の入り口に感染していれば、数年から数十年かけて子宮頸がんに行進することがあります。そのため子宮頸がんの予防には、子宮の入り口に感染するリスクの少ない10代前半の若い世代にワクチンを接種する必要があります。

10年以前より
定期予防接種を行って
いる国では、今ではワクチンによって子宮頸がんの発症が抑え



られています。一方で、日本の接種率は極めて低く、ワクチンのなかった時代と同様に子宮頸がんのリスクにさらされています。お子様の未来を守るために、ワクチンを接種させてあげましょう。

（知っていますか？）

三種混合ワクチンの新しい助成制度

加古川市から小学校就学前の年長さんに対して、令和4年度より三種（百日咳・ジフテリア・破傷風）混合ワクチンの2,000円分の助成券が配布されました。これは、令和3年度までにはなかった新しい制度ですので注意が必要です。現在の中学生が赤ちゃんの頃には、定期予防接種として使用されていきましたので、新しいワクチンではありません。保護者の方の心配も少なく、接種しやすいワクチンだと思います。今の就学前のお子さんは、幼少期に四種（三種・ポリオ）混合ワクチンを済ませています。しかし、5〜6歳になるとワクチンの免疫効果が減っていく、小学生で百日咳にかかりやすくなるのが分かってきます。追加接種をすることはお子さんを守るだけでなく、重症化しやすい赤ちゃんを守ることもつながります。

（日本脳炎ワクチンは接種できていますか？）

1時期、国内でワクチンの供給が不足してしまい、このワクチンを受けるタイミングを逃したお子さんがおられます。7歳半までに3回の接種が終わっているか、9〜12歳までに4回の接種が終わっているか、再度確認をお願いいたします。

「衛生観念」の高い国

―その根底にある―

学校保健という制度

加古川中学校 PTA会長

富田 資之

「保健」と聞けば皆さんはどういった事を思い浮かべるでしょうか？病氣、健康、保険証、予防接種いろいろ連想すると思います。では、学校の場合に絞ればどうでしょうか？一番に「保健室」が思い浮かぶのではないかと思います。

保健室の役割についてですが、当初は集団活動の場である学校における伝染病の感染を防ぐことを目的とする場でした。その後、今という健康診断を実施する場となり、現在では保健教育、健康相談、学校環境の衛生、メンタルヘルスケア、アレルギー疾患対応、救急処置、疾病予防など多岐にわたる活動の場となっています。これらの事が一般的に言われている事ですが、もっと深く関わってきた気がします。例えば、日本は「衛生観念」が非常に高い国だと言われていますが、そのおかげか新型コロナウイルス感染症対策も、日頃受け入れられ徹底されました。その高い衛生観念のもとになって